

Title	新プラトンの『流出説』の一問題
Sub Title	A problem in the neo-Platonistic theory of emanation
Author	神山, 四郎(Koyama, Shiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1949
Jtitle	史学 Vol.24, No.1 (1949. 10) ,p.84- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19491000-0084">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19491000-0084</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 新プラトンの『流出説』の一問題

神山四郎

〔前記〕

本研究は新プラトン説における「流出」「還帰」の形而上学的原理を歴史哲学の一問題として捉え、特にその源流をプロティノスに求めてそれが漸次ポルフィリウス、プロクロスを経て偽ディオニシウス・アレオパギタに伝へられキリスト教世界に導入されるに及び、そこにキリスト教原理の重要な影響を受けて内容的に変移しつつ中世スコラの思弁に広汎な基礎を與へ、その形而上学体系の構想を規制して行つた跡を思想的に辿らんとするものである。こゝに試みた小論はその極く一部、即ちプロティノス、プロクロス体系における流出的汎神論性格をキリスト教神学の諸概念と暗裡に対比しつつ、学説史的に説明したに止まる。それ故本論文は本研究の端緒をなすに過ぎず、やがてこの新プラトン説が同じ術語表現を用ひつゝ徐々に内容的にキリスト教化され行く過程の叙述にその究極の意図を有する。

プロティノスの形而上学における万有の根源 *arche* panton たる「一者」to hen は「實在の彼岸」*epekei-nousias* (Enneades. V. 1, 6; V. 5, 6. 以下番号のみ記載) のものとして一切の存在を超えてゐる。それ故一者はいはば存在より高次のものとして、存在性一般において捉えることはできない。従つてその故に分量、性質、空間、時間等一切の物的性質を一者に帰することは当然でない。而して又「存在のかなたにあるものは思惟しない」(V. 6)。何となれば一者は対象に規定せられず、従つて意識及び認識一般があり得ない。対象なく意識なき処に意志も亦あり得ず、意志なき処に運動もあり得ない。かくて一者は何ものをも知らず、欲せず、何ものをも所有せぬ。最も充足的にして「自ら足れるもの」to autarkes 「単独なもの」to monon である。而して單独なる故、複合物についてははれる本質 to ti がなく、自足せる故、附随においてははれる性質 to hoion もない。従つて一

者にはその扱れる如何なる理扱 *to diati* も求められず、第一原因として自ら最高の原理であり、かくして一者は「絶対者」*to haploun* といはれる。而してそれは又同時に「善」*to agathon* として規定される。而してこの存在性に対する善性の優位はとりも直さずプラトン説の繼承に他ならない。この故に一者はあらゆる名辭の表現を絶して万有の「太原」*to proton* といはれる。

このプロティノスによつて考へられた一者、善、太原の超越的性格はギリシャ哲学の末期に到達し著しい特色の一つである。これは既に古代ミレトス学派よりギリシヤ自然哲学史のうちに脈々と流れつづけて來た万有原理 *arche panton* の探求における新プラトンの発見であり、プラトンの中間者デーミウルゴスによつて保証されたイデアの宇宙形成における超越者性格の要請に應へるものであり、更にフィロン等の影響によりヘブライズムの超越主義を導入せるアレキサンドリア宗教哲学の帰結であつた。

かくしてこの一者は最高の現実態として、アリストテレス的概念の潜勢が現勢に移る如き如何なる運動もない。然るに自ら「万有の力」*dynamis panton* であり、自ら「沸騰」*zein* し、その「充溢」*hyperpletes* がいはば溢れ出て多者の世界を産出する。太原は一切を造つ

て自己にとどまり、いささかも己れを減ずることのない「無尺藏の力」(V. 3, 16) である。一者は「何物をも求めず、有せず、必要とせぬ故、完全成熟であり、完全成熟であるからいはば溢れ出たのであり、その溢出が他を造つたのである」(V. 2, 1)。

而してこの太原の第一次の溢出によつて産出されたものが「一者に還歸し、それに充たされ、かくてそれを觀て叡智 *nous* となつた」(V. 3, 1) のである。而してこれは「一者を分有し」(III. 8, 9)、「一者の最も強いかたどりを有してゐる。この善なる太原の流出、分有、還歸の形而上学的原理はプロティノス以後アテナイ学派に繼承され、特にその頂点をなす後継者プロクロス Proklos Diadochos (410—485) によつて次の數個の命題に定式化された。「すべての存在者は唯一の第一原因から発出する」(Stoicheiosis Theologike, Institutio theologica. 命題一一)。「善はすべての存在者の原理即ち第一原因である」(命題一二)。「すべての善はそれを分有するものを合一し得るのであり、すべての合一は善であり、善は一者と同一である」(題命一三)。「すべて生むものは、その完全さと力の充溢とによつて第二次的のものを生む」(命題二七)。「すべての発出は、第二次的のものが第一次的のものに對して有する類似によつて完成する」(命題二九)。「すべて

て或るものから発出するものは、実体に関して発出の出発点へ還歸する〔命題三一〕。すべて或るものから発出しそれへ還歸するものは円環的な働らきを有する〔命題三三〕。

ここにおいて流出の段階系列が生ずる。即ち「叡智」*nou* は太原から生れ、それを観ることによつて始めて「存在」*to einai* と「思惟」*to noein* を有して最初の実体 *ousia* となつた。而してここに認識主体と認識対象の別が生じて始めて二元性——多者——の世界が生じたのである。然るに叡智は質料からは全く離存し、その限り感覚が未だ存しない故、この認識はいはば直観知であり、結局認識対象が自己のうちに包含されてゐる高度の自意識である。この自意識において「存在」と「思惟」は統一され、その現勢的運動において一と多は「渾一的なもの」*homopantata* となり、かくして叡智も亦「永遠」*aion* である。而してプロテイノスはこの叡智の一者に還歸し、最も一者にかたどれる一者側面を全的叡智 *sympas nous* とし、一者を分有せる個々の叡智の多者の側面を個的叡智 *ekastos nous* として分類してゐる。この個的叡智がまさにプラトンのイデアに相当する。けだしプラトンの所謂イデアは遂に個的性格を超えることがなかつたから、プロテイノスの太原 *Proton* はプラトンのイデアの

更に超越的な原理であるといふことができよう。

次にこの叡智が同じくそれに先立つ一者の如くに流出して「靈魂」*psyche* を産出する (V. 31)。靈魂は上に向つては直観しつつ叡智の内容——イデア界——を受けとつて、自ら形相として働らきつつこれを下に向つて質料界に射影して所謂感性界を形成する。ここに至つて始めて叡智は質料界に自ら影を落すのである。靈魂は叡智に還歸する限り、叡智の本質を享受し得て不可分の一なる者となり得るが、感性界に向へる限り質料と交はつて *koinonia* 可分的にして分散的になる。ここに靈魂の質料に対する可離的性格がある。而して靈魂にも叡智の分類に相應して宇宙靈魂 *psyche tou kosmou* (*pantos*) と個別靈魂 *hai psychai* とが分けられ、前者は叡智を——専ら全的叡智を——直観しつつ「常に聳えて」叡智から大きな力を得、叡智的秩序を受けて下位のものを照らすのに対して、後者は前者の支配下に個々の肉体に落ち込みこれを「世話」してゐる (VI. 3, 4)。

而して次にこの宇宙靈魂が質料の中に自らを射影して産出されたものが「自然」*physis* である。自然は一者の流出による第三次の産出であり、靈魂と質料の間者である。而して自然は質料と不可離的に結びついてゐる。然るにこれは靈魂が通訳者の如くに叡智の光を伝達して

産出した結果叡智の面影を宿してゐる。要するに一者の流出において自然は叡智の最低段階に他ならない。その限り自然にも知覚、synesis や共感、sympatheia が帰せられ、要するに自然は低き精神であり唯それが覚醒せる感覚においてなく、いはば眠つてゐる状態にあると考へられてゐる。ここにプロティノスの自然哲学の唯心的性格があるのである。

これに対して「質料」hylé はもはや叡智の如何なる影も及ばず何物も生まざる「最後のもの」to eschaton である。これは單に宇宙靈魂の働らきを受取るだけのものであり、叡智の現勢的なるに反して全く潜勢的なものとして止まり、何等の形相の規定なくただ一切事物の基体として残る非、感、受的、apatheia なものである。而して叡智の如何なる影もなき処に「非存在」me on ともいはれ、太原なる善の全き欠除においてそれは「根本悪」to próton kakon でもある。

## 二

然るにこの超越的絶対者として第一善なる太原は同時にプロティノスにあつては「神」とも考へられてゐる。プロクロスの命題はこれをより鮮明に規定して「善と一者が同一なる以上、一者は神である。何となれば、善と

神とは同一であるから」(Ibid. 命題二三の理由)といふ。けだしこれはミレトス学派以來万有の根源に何れも神の名辭を歸し來たつた自然神の概念であり、且つプラトンの命題の端的な表示に外ならないが、この太原 próton を神とする処にプロティノスの神概念の飛躍的優位が存するのである。即ちその神の一切の實在を超える超越性は従來の神の宇宙万有に内在する汎神論的性格を越え、更に實在界のピラミッドの頂点にあるプラトンの神をも越える。而してそれは一者として当然一神的性格を有する。かくてプロティノスの思弁は一神教を弁護するかの如くである。

然るに、太原は前述の如く第一次の流出によつて多くの個的叡智を生む。而してこれは如何なる質料からも離存して超感覺的、永遠、自由にして宇宙の叡智的運動そのものであり、下位の運動を宰りつつこれを予知(「攝理」pronoia)するものである限り、太原なる神の能力を分有して神的本性を享けることができる。更にはこれが宇宙靈魂、個別靈魂を生むが、これ等すらも夫々叡智に還歸しつつ感性界に落ちぬ限り、叡智の分有を通じて一者の神性を享受し得る。その限り叡智界、靈界において神の本性分與によつて成れる「神々」の存在を許し得るものである。かくてプロティノス自身も叡智 nous を時

に「第二の神」といつてゐる。

新プラトン派のこの宗教哲学的側面はプロティノス以後シリア学派において極度に偏重され、同時に当時復興せる新ピタゴラス説に合し特にその象徴数学を援用して、例へばヤムブリコス Iamblichos 等は分有による神々の数序列を無数に増加して果ては神智学的妄想と化してしまつた。然るにその後哲学的関心を比較的健全にとり戻したアテナエ学派においても、例へばその代表的なプロクロスの体系を見れば明白に「神々」を論じてゐる (Stoicheiosis Theologike 命題 I 三—一六五)。而もそこには神話の神々も混入して居り、これは恐らくギリシャ神話の哲学的形骸の最後のものであらう。即ちプロクロスの神は、一者を分有し「存在者」*to on*「生命」*zoe*「叡智」*nous*を越える「超越的一者」*henas*を以て当てられてゐるが(命題一四・一一五)、結局これは最高段階の多者に他ならず、かくて多神を容れるものである。而も「神々の全数は一性を有し」(命題一一三)、「すべての神は、一者により近くにあれば普遍的であり、一者からより遠くにあれば特殊である」(命題一二六)といふ理拠において神々——即ち *henades*——の序列階級を定立してゐる。而して「靈魂」*psyché*の領域において天使、ダイモーン、英雄等が生れる。かくしてプロクロス

の流出説における「すべて各系列の本原的な原因は、その全系列に自己の特性を與へる。原因は第一次的に或るものであり、全系列は減衰した度に於いてそのものである」(ibid. 命題九七)といふ原則は、ここ神々においてもその適用を洩れるものではない。かくて新プラトン派の哲学はアテナエ学派においても多神教の思弁的弁護となる。

然るにこれに対してキリスト教は同じく絶対超越的一神を奉ずるが、それが單なる概念ではなく獨特の啓示眞理に基き三位なる位格神なること、而してそれ等が内属的発出 *processio* 歸一の原理に基き各位格相互の完全性を保持しつつ完結的一体をなし、宇宙人類はただ外向的に聖父なる神の自由なる意志によつてのみ創造され、更にその善なる状態を毀損せる罪の世に対しては聖子の託身、贖罪、聖靈の助力、成聖といふ上よりの恩寵 *gratia* による救済を説くものとして、ヘレニズム思弁とは凡そ異質的世界觀をもつて登場する。而してそれは解体に喘ぐローマ世界の罅隙に浸潤して一面において激しい迫害も受けたが、他面二世紀頃よりヘレニズム思潮と微妙な接触をはじめ、就中ギリシャ哲学の伝統に深く根ざす東方世界において複雑な相互滲透の様相を呈したのであ

る。即ちこの新プラトン説をキリスト者が受容するや、それは初代教会三位一体論における聖子、聖霊の発出論議に当つては当然その性格上破綻を示し、グノーシス派のキリスト仮現説 Docetismus アリウス派の聖子従属説 Subordinationismus 等東方諸異端説発生の根源をなしたが、同時に他方又正統キリスト教世界においても初代教父の何れもが拠れるところとなり、その護教に教義体系の確立に重大な寄與をなすといふ重層せる精神的役割を果したのである。

而してここにおいて前記プロクロスに直接依拠せる六世紀初頭シリアの人といはれる覆面の思想家偽ディオニシウス・アレオパギタ Pseudo-Dionysius Areopagita を通じて、プロテイノス、プロクロス体系は漸次東方キリスト教世界に移入されたのであるが、キリスト者ディオニシウスが同じく神の善性を分有してそれへの近接度において天使の諸階級、聖職位の位階的序列構成即ち Hierarchia を考へる時、或は又彼自らの拜礼する神を「神々の神」、「聖中の聖」、「王中の王」といふ時、彼も亦新プラトンの多神論者であつたであらうか。彼はそれを自己の信仰に則し啓示内容に補足されて辛くも脱してはゐるが、兎に角アレオパギタの教説はその表現上流出汎神論等異端傾向を多分に有せるまま西欧思想界にもちこま

れ、奇しくも聖アウグスティヌスの絶対的權威と並んで後代に多大の影響を與へて行つたのである。<sup>(4)</sup>即ちその新プラトンの神秘体系は聖マキシムス・コンファッセル Maximus Confessor (580—662) の註釈を介して九世紀エリウゲナ J. Scotus Erigena (810—880) に伝へられ、彼のラテン訳するところとなり、一方においてかの問題の著—校書の厄に遇える—「自然区分論」De divinitate naturae を成さしめ、これよりベナのアマルリックス、ディナンのダヴィド等汎神論異端者を生み出したが他方このラテン訳が西欧世界に広く流布されアリストテレス形而上学の輸入に先立つ前期スコラ学思想界に貴重な典拠となり、十二世紀シャルトル学派を通じ、又聖ヴィクトル学院のフーゴー Hugo (1096—1141)、リカルドゥス Richardus (1173歿) を経て、十三世紀フランシスコ会聖ボナヴェントゥラ Bonaventura (1221—1274) に至るスコラ学正統神秘派形成の枢要な中軸をもなした。更にこれは聖ボナヴェントゥラ自身の全形而上学の根基となつてそれを<sup>(5)</sup>発出、範型、還歸説に要約せしめ、且つ聖トーマス・アクイナス Thomas Aquinas (1225—1274) の「神学大全」Summa Theologica の全構想をも規制して、「トーマスの体系が Theismus の立場を離れずに出來得る限り汎神論に近い所迄行つてゐる」と云はしむる根拠を與へて

るのである。

かく見來れば新プラトン説は極めて自然的経緯のうちにキリスト教世界深く導入され複雑な混淆を経て、一面異端傾向への危胎を孕みつつも、同時にキリスト教哲学形成に普汎な幹軀を供したのである。然らばかかる錯綜せる様相の解明を何処に求むべきであらうか。我々はその源流を尋ねてプロティノスにまで遡つてみなければならぬ。「キリスト教の前庭」(アレキサンドリアのクレメンス)といはれるギリシヤ哲学はプロティノスに至つてその内奥への一步を踏み來たつたであらうか。問題はその神觀に存する。然るにその根元的な radicalis 解明は更に太原流出の問題に溯る。

### 三

プロティノスは超越的太原から叡智が出るところを考へるのに最も苦心した如く、そのために先づ神自身を呼び求めなければならぬと云つてゐる(V.1.6)。彼は結局この産出の表現に感性界の比喻を用ひなければならぬかつた。即ち或は「充溢」hyperpléses 「溢出」hyper-errýe としひ、或は「源泉」péte からの「流出」rho, aporrhe 更には好んで太陽の比喻を用ひて陽光の「放射」parilampsis とした——而してこの「流出」といふ字

が屢々これを代表して中世以後 emanatio とはれた。故にこの溢出或は流出は形而上学的な超越原理からのものであるといふことの比喻にすぎず、この超存在的なものからの発出に時間的経過、空間的拡がりの如き如何なるものも問ふことができない。何となれば時間や空間は太原においては勿論のこと、質料なく超感覺的にして永遠なる叡智においても未だあり得ないからである。それが生ずるのは靈魂が質料に己れの本性を投影した時、いはば「自然」physis が産出された時始めてである。空間は質料に溶ちた叡智や靈魂の分散であり、時間はその運動である——然もこの自然感性界にとつて本性的に不可分な時間もそれが叡智の影像である限り「永遠の似姿」aiónos eikóna をもつてゐるとすら考へられてゐる。それ故にこの太原の流出を直接時間論において扱ふことは無論できない。問題は太原の「力」dynamis の論理である。

即ちプロティノスにおいては一者は一方において完全なる自足者、最高の現勢態としてもはや不足或は潛勢に起因する一切の運動なきものとされ乍ら、他方この流出的宇宙産出に關して「実体なき第一の運動」者(V.8.20)として規定されてゐる。いはばこの運動をなさしむるも



のが「万有の力」*dynamis pantón* (H. 8, 10) なる太原の本然の能力なのである。かくて一種生命的な比喩において一者が「完全成熟であるからいはば溢れ出たのであり、その溢出が他を造つた」(V. 2, 1) といはれるのである。この場合プロテイノスにとつて一者のこの溢出的産出活動を最もよく表現し得るものは、当時の思想界にストア派の「力」の概念を措いて他になかつたであらう。何となれば彼が太原を *dynamis pantón* とし「時」一方において彼は既にアリストテレスから潜勢 *dynamis* (*potentia*) と現勢 *energeia* (*actus*) における *dynamis* の概念を学んでゐたことは明らかであるが、この場合当然これは用ひられないので、他方同時に知つてゐたストア派の力における *dynamis* の概念を用ひて、これを太原の溢出原理に適用したものと考へられるからである。<sup>(8)</sup> 即ち先づストアのそれを見てみよう。ストアの形而上学においては宇宙の原理は「根源的物質」*proté hylé* なる「氣息」*pneuma* と考へられてゐる。然るにこの氣息は同時にヘラクレイトス的な「形成的火」*pyr technikón* であり、自ら万物の「依れるもの」*Dia* あらゆる能動の原因として質料の中深く浸透してゐるロゴス的な活動体である。<sup>(9)</sup> 而して万有の形成は、この自ら永遠に生きて無限の力を有する質料的にして同時にロゴス的な氣

息の実体変化と見られてゐる。けだし氣息は宇宙形成の根源物質としては自ら質料因 *causa materialis* をなすが、同時に形成のロゴスの原理として形相因 *causa formalis* をもなしてゐる。而してそれが又同時に自らの力において、生命的統一をもつて機動因 *causa faciens* としても働らいてゐるのである。かくてそれは更にヘラクレイトスの「火」を思はしめる——「すべてのものに対して同一なるこの世界は神からも人からも造られたのではなく、過去現在未來を通じて存し、矩に従つて燃え矩に従つて消ゆる永遠に活きる火、*pyr aeiζoon* である」<sup>(10)</sup>。氣息は自らの力の充溢——即ち質料因、形相因、機動因の生命的統一——によつて宇宙を造り、宇宙と成り、且つ種子的ロゴスとして宇宙に内在し、自らは減ずることなく止むことのない無限に活きる実体である。万有はこれより成り、世界炎上によつて再びこれに還る。

プロテイノスの太原も「はば」の意味の力 *dynamis* において充溢すると考へられる。即ち太原の「充溢」或は「溢出」といふ比喩的概念はこの「力」を前提として始めて妥当する。かくて「すべて存在するものは、それが存在する限り、その周囲に外に向つて、その現存する力に依存する存在を、その本質から必然に成り立たしむる」(V. 1, 6) 「成熟完全の状態に達せるものはすべて

生むものであるから、永遠に成熟完成せるものは永遠に永遠なものを生む」(ibid.)、「完全なる成熟の状態にあつてはそれ(叡智)は生まざるを得なかつたのであり、かくも大いなる力が産出能力をもたぬといふことはあり得べからざることであつた」(V.1.7)といふ如く、太原の溢出はいはば「沸騰する」zein 如く自らの力において自然必然的であるといふより他ない。そこには理由もなく、目的もなく、唯太原は生まざるを得ず、而して一切を造つてかへりみず、而も永遠に造つて自らは永遠に止まる。その故に太原の力は無限であるといはれる。ここにおいてプロクロスの「すべて生むものは、その完全さと力の充溢とによつて第二次的のものを生む」(命題二七)、「すべて常に存在するものは力が無限である」(命題八四)といふ二命題は新プラトン説の本質命題をなすが、そこに同時に或る意味で新プラトン説のストア説を通じてヘラクレイトスの思惟世界への溯行を見ることができ得あらう。而してプロクロスが「叡智」nousの前に「生命」*noia*を流出する——即ち生命が叡智より高次のもの——と考へたことは、勿論プロティノスの意ではないが、反つてそれは新プラトン派のストア説への偏向を一層明瞭に物語るものではなからうか。

かくしてこの力 *dynamis* の概念を適用することによつて太原の溢出は或る意味で実体変化的なものとなり、その溢出契機 *momentum* はストア、ヘラクレイトスの如く不可測無限な力の溢れにおいていはば自然必然であるといふことになつたが、更にそのため溢出様態 *modus* においてもストア、ヘラクレイトスの根源物質のロゴスの運動様態と本質的に異なるものではなくなつた。即ち太原は第一次の流出によつて叡智を生むが、この叡智は「一者を分有し」、「かのもの(一者)のかたどりである」。而して「まづ第一に産出されたものは或る意味において第二のかのものであつて、かのもの多くの特質を保有し、まさに陽光の太陽に対する如く、かのものとの類似がなければならぬ」(V.1.7)といふ原則は、この流出において一者の分有が「影像」*indalma* 或は「似姿」*eikon* といふ比喩的表現においてなされてはゐるが、結局はただ一者の完全性において劣れるのみで、その本性を分與するといふこと自体を本質的に否定するものはない。それはむしろ積極的に「展開」*exeltein* ともいひ得べきものであつて、要するにそれが順次以下靈魂、自然において下降的系列を有する場合の一義性 *univocatio* を遂に解決し得なかつたのである。ここに

おと一者 *to hen* 叡智 *nous* 靈魂 *psyche* の三者が

結局は根源的基体 archikai hypostasis (V. 1)として一義的に把握され<sup>(12)</sup>、自然も亦叡智 nous の面影を宿すといはれる所以があるのである。そこにおいて各存在領域は一者の本性分與に應じ、一者よりの直列的下降順位に位置付けられ、——かくて又ヘラクレイトスの「下り道」 hodos kato を思はしめる——その限り各存在者の本質は一者の分有の減衰度に準じて規定される結果となる。従つて各存在は一者の分有においてその本質をもつ仕方に應じて「在り方の少ない存在は、それが一であること」の程度も低く、在り方の高い存在はそれだけ多くの一性をもつわけである」(H. 9, 1)。プロクロスはこれを定式化して新プラトン説の本質命題とした——即ち「すべて各系列の本原的な原因は、その全系列に自己の特性を與へる。原因は第一次的に或るものであり、全系列は減衰した度においてそのものである」(命題九七)。この意味において万有(多者)は一者を分有し、而して一者に還歸する限り一なるものとなるのである。かくて宇宙は善性を帯び智的映像をとどめて叡智的秩序のうちに偉大なる調和 harmonia をなす。悪なる質料すらもその宇宙的調和において叡智的階調に寄與し、かくて世界は美となる。

結局プロティノスの宇宙相は太原の溢れ出る力によつて産出された叡智的世界像であり、質料界に射影された

光の濃淡度合における叡智的階調をなすものと考へられる。かくしてプロティノスは万有の根源を一者の超越性において捉え、その流出による宇宙形成の直列的下降配列を考へることによつて、ミレトス エレア学派以來の宇宙秩序におけるロゴスの根源の内在的把握を越え、更にそれへの無限回帰による宇宙生滅の循環運動を克服して<sup>(13)</sup>、歴史哲学の形而上学において重要な一步を進め得たのであるが、かくの如き太原の溢出原理において反つてストア説を通じてヘラクレイトス、アナクシマン드로スの宇宙形成説に或る意味で則する結果となつてしまつたものと思はれる。即ちプロティノス、プロクロスにおける根源の産出様態は、嘗てアナクシマン드로スが無限者 apion から分離として、アナクシメネスが空気の濃化と稀薄化において、ヘラクレイトスが永遠に活きる火の万物との交換、或は過多と不足において、更にストアの人々が氣息の緊張といふ力量關係において捉えた根源物質の運動様態を遂に克服するに透徹たり得なかつたといふことができよう。それはまたギリシヤ人の宇宙觀照の限界でもあらうか。

而してストアの人々が万有の原理なるこのロゴ斯的氣息 pneuma を神と呼んだ如く、更に高踏の人ヘラクレ

イトスがオリュムポス神もデオニソス信仰も退けながら永遠に活きるこのロゴスの火 *Pyre* を敢へて神とつた如く、プロテイノスもこの太原を神と呼ぶ。太原が神なら万有は夫々神性を分有し、神の実体を幾許か本性的に享受する。而して人は感界を超脱して叡智において太原なる神に還帰する限り、必然的に神と「合一」(*henosis*)、「神となる、否寧ろ神である」(VI. 9. 9)。そこにおいて質料なる悪は自然的に捨象され超克される。かくてプロテイノスの体系はツェラー、ユーベルウエック等もいふ如く *dynamischer Pantheismus* としはざるを得なく、而してストア説により接近せると見られるプロクロスの命題はこれをより一層徹底的に定式化してゐる。「すべての神的な秩序の特質は、すべての第二次的のものを貫き、すべての劣つた類のものに自己を賦與する」(命題一四五)。「すべて神的な超越的一者 *heas* を分有するものは、上は存在者から下は物体における自然に迄及んでゐる。けだし分有するものの中第一のものは存在者であり、物体は最後のものである」(命題一三九)。「神々のすべての力は上方から始まり、固有の中間者を通じて発出し、最下のもの、土の領域にまで及ぶ」(命題一四〇)。「神々はすべてのものに同様に臨在する。……各々はその段階と力に應じて神々の臨在を分有する。」(命題一四二)。

#### 四

ここにおいて新プラトン説の汎神論的形而上学が反つてキリスト教々理との鋭い対立を示す以外のものではないことが明らかにされた。かくて歴史の示す如くローマ帝政末期、異教的多神論弁護に新プラトン派の人々が一臂の力を貸し、キリスト教排撃に加担したことはあやしむに足りない。プロテイノス自身はそれに対してはまだしも寛大で、強硬な対決を示して居らず寧ろ信仰として黙認の程度であり、或はカリエヌス帝の時キリスト教徒の迫害が一時中止され、教会が復興されたのは彼の諫止によるものとすら云はれてゐる程であるが、然るに彼の弟子ポルフィリウス *Porphyrios* (C. 293—304) は後年諸教父に屢々指彈される「キリスト者駁論」(*kata Christianon*) を書き、更にこの傾向は四世紀に入ると前述の如くシリヤ学派において極度に助長されて、占術、呪術、巫術等氾濫のうちにヤムブリコス、背教者ユリアヌス帝 *Julianus Apostata*、リボニウス *Libonius* 等古代多神論復活の狂信者を数多排出するに至つた。これに対してキリスト教徒の側も一部狂信徒が女流新プラトン学徒ヒュパチア殺害(四一五年)の暴挙に出づるなど頑強な應酬を示し、両者の抗争はユスティニアヌス帝のアカデミア閉鎖令(五

二九年)に至る迄激しく続いたのである。然るにこの確執がキリスト教の勝利に帰すると共に新プラトン派は再び哲学的活動に復帰し、プラトン、アリストテレスの註釈或は自派の形而上学的綜合体系への努力にと向つたのであるが、プロクロスの如き種々奇蹟を行ひ屢々神を見たといはれる魔術家的性格はやはり新プラトン派の人たるを物語るものである。

更にキリスト教の内部においても、グノーシス派が超越的神と質料界の対極的二元論に立ちつつ神性の分化流出によつてその質料界へ漸次弱体化し行く有限過程に宇宙形成を捉え、且つ救霊において信仰 *πιστις* の知識を専ら認識 *γινωσκω* によつて得んとするところに新プラトン説依拠を明らかに示し、正統教会がそれを異端として執拗に排除しつづけた理由も自ずと明らかになるであらう。

要するに新プラトン派の神は万有のロゴスの根源に命名したギリシャ哲学の伝統的自然神の概念に外ならず、その超越的一性においてキリスト教的神概念への近似を思はしめたが、その宇宙産出における流出説 *Emanationstheorie* において汎神論的性格を遂に脱することができなかつた。然るにこの太原 *proton* を神とすること

は本来プロテイノスがプラトン、アリストテレスを超えて叡智 *νοῦς* 以上の根源に溯らんとして試みたもはやギリシャ的主智主義 *Intellectualismus* ならざる努力なのであつた。そこにフィロンを通じてヘライズムの乃至は東方密儀諸宗教の影響如何は兎もあれ、彼がプラトンの教説に対する絶対的憑依の上に偶々ストア的概念を適用したことが、反つて或る意味でストア、ヘラクレイトスの思考への偏向溯行を齎してしまひ——而もそれはプロクロスに至つて一層促進された感があるが——ヘライズム境位内に自らを局限せしめたとはいへ、彼の眞意 *intentio* はこのギリシャ的主智主義に則しつつ而も同時にその限界を超えんとする処にあつたものと思はれる。かくしてエンネアデスの眞義はこの哲学逸脱の危険——それはヘライズム思弁、就中プラトン教説にとつて致命的と見ゆる——<sup>(16)</sup>を敢て冒してまでも太原の超越性を保持し、それより宇宙の下降的産出及びそれへの万有還帰における神祕的觀照 *theoria* を説くところにあつたのである。その意味において彼の形而上学の動的体系は超在的神に発し、理智を超えた神との「脱魂的一致」*ekstasis* にその極点を有するものである。然るにこの宗教性の翹望にはヘライズムの能く應へ得べくもなく、結局その十全なる表現はキリスト教的神祕説において始めて成さ

れたのであつた。かくして彼の存在はギリシヤ哲学最後の高峰をなし、隣峰のフィロンと相並んでキリスト教世界に長くその裾を引くものであつた。即ちキリスト教哲学は先づこの新プラトンの遺産を教義の許す領域内において多面的に受け嗣ぎ、これによつて自らの形而上学思弁に可能な限り広汎な幅と深さを與へられ、同時にそれを嚴に啓示内容に徴して汎神論的流出原理を矯正しつつ、その動的性格を自らの体系確立に具用して行つたのである。そこに反つてプロティノスのなし得ずして眞に意図する処はむしろ移植實現されて行つたものと見られ、かくてこそ彼に對する聖アウグスティヌスや聖ボナヴェントゥラの讃辭も亦決して故なきものではないのである。かくしてプロクロスの直系といはれるディオニシウス・アレオパギタが自らキリスト者であり乍ら新プラトン説の忠実なる繼承者として登場し、プロティノスの原理をキリスト教世界に通用せしめたといはれることが重要な意義を有するのである。然るに又他方彼は深く正統信仰に立脚し、その神觀をプロクロスとは凡そ別種の泉に汲んでゐるため、彼の説く新プラトン説は自らのキリスト者的身体を包む外衣にすぎなかつたともいはれるのであつて、<sup>(17)</sup>何れにせよディオニシウス偽書においてキリスト教原理と新プラトン説の融合は微妙な交錯を示して

居り、その精神において信仰 *pietatis* の優位を保持しつつも、表現において一義的解明を不可能ならしめる複雑な面貌を秘めて西方に一條の光芒を投げてゐる。

(一九四八・一二・一)

〔註〕

(1) プロティノスの流出的存在系列が、「一者」*to hen*「睿智」*nous*「靈魂」*psyche*「自然」*physis*「質料」*hylē*であるのに対して、プロクロスの段階系列は「一者」*to hen*「存在者」*to on*「生命」*zoe*「叡智」*nous*「靈魂」*psyche*「動物」*zōa*「植物」*phyta*「無生物」*nechra soma*、<sup>(1)</sup>「質料」*hylē*である。而してディオニシウス偽書はそれ自身体系的なものではないが、その構想はプロクロスのこれに大體準拠してゐる。

(2) 「天使階級論」*De caelesti Hierarchia*: 「教会位階制度論」*De ecclesiastica Hierarchia*. übersetzt von J. Siglmayr. s. j. (Bibliothek der Kirchenväter. 1911)

(3) 「神名論」*De divinis nominibus*. übersetzt von J. Siglmayr. s. j. (Bibliothek der Kirchenväter. 1911) Kapitel.

勿論これは單なるヘブライズムの表現で、内容的に多神的意味はない。

(4) 後代に與へた影響の大なるものは前記三書にもまして「神祕神学論」De mystica theologiaである。中世、近代を通じて西歐神祕思想のこれに何等かの影響を受けぬものはなからず、いつも過言ではない。尚これに十部より成る書簡 Epistulae を加けて全著作とされてゐる。

(5) et haec est tota nostra metaphysica: de emanatione de exemplaritate, de consummatione, scilicet illuminari per radios spirituales et reduci ad summum. (Collationes in Hexaëmeron. I, 17; t. 5. p. 332):

E. Gilson, La philosophie de Saint Bonaventure. Paris, 1924. p. 442~

(9) 岩下壯一著「中世哲学思想史研究」岩波書店、四六頁。  
 (7) この場合神を呼ぶ、或は祈るといつてもそれは——その直ぐあとでプロテュノス自身云つてゐる通り——自己の精神の上で自分自身をひき上げて大原なる神に向ふ、即ち叡智的直観を意味するのであつて、キリスト教の照明の如く注賦の意味はない。

(8) 如何に思潮混淆の当時とはいへ、これ以外の根柢は尋ねられない。ストア説の新プラトン派への影響は、哲學史的に辿ると、ソクラテス前期、プラトン、アリストテレス説の広汎な綜合を企図した中期ストア派のポセイドニオス Poseidonios (c. B.C. 135—50) を通じて主に流入があつたものと考へられるが、それ以後も一々明細は判明しないが、一般的にかなり大きな影響があつたと

いふことは充分で考へられる。プロテュノスがこの大原流出の一元論・動的汎神論 dynamischer Pantheismus にストアの概念を用ひたところを、アウグスティヌスも認めてゐる (Ueberweg; Gesch. d. Philosophie. I. Teil (Altertum), 1926. S. 590)。

(6) protē hylē (Diogenes Laertius, VI. 150. Zeno.) pyr technikon (ibid. VI. 156. Zeno.)  
 而してストア説は同時にギリシヤ神話の混入があり、その氣息は生命の源として Zēna と呼ばれ、或は海や大地に遍存内在于してゐるものとして Poseidōna, Dēmētān と呼ばれてゐる (Diogenes Laertius, VI. 147)

(10) H. Diels; Die Fragmente d. Vorsokratiker. 1912, Herakleitos, 30. S. 84

(11) 註(1)参照。  
 (12) かの hypostasis を substantia とすれば、勿論一者の超越性が否定されるが、流出の点から見ればどうして一義性を排除するに不十分である。プロテュノスの表現自体もかなり不分明で、こゝに新プラトン説の難点がある。ハイネマンも結局プロテュノスの体系を一義的な直線系列と見しつゝ思ふ。F. Heinemann; Plotin, Forschungen über d. plotinische Frage, Plotins Entwicklung u. sein System. Leipzig, 1921. S. 244

(13) Heinemann; ibid. S. 244—5 参照。  
 (14) Zeller = Nestle; Grundriss d. Gesch. d. griech.

Philos. 1928. S. 361. Ueberweg; Gesch. d. Philos. I. Teil (Altertum). S. 590.

(15) W. R. Inge; The philosophy of Plotinus. Vol. I. 1923. p. 65. 鹿野治助著「プロティノス」弘文堂「三三—三四頁。

(16) 或はプラトンは彼の弁証法を以てしてはこの哲学逸脱の危険を避け得ざるものと察知して、善のアイデア以上の神を云ふべくして敢て云はず、アカデミア門外不出の秘教としたのかもしれないが(第二、第七書簡参照)。

(17) 後者の立場は近代におけるディオニシウス偽書の優れた考証家、翻訳者たるシュティクルマイヤーの考へである(1bid. Deber heilige Namen. Einleitung, s. 10)。又一般キリスト教哲学史の立場からジルソン、ベーナー等もこの見界をとつてゐる(Gilson = Böhner; Die Gesch. d. christl. Philosophie. 1937. O. 135)。尙溯つては聖トーマスも聖マキシムス・コンフェッソルもこの立場に立つて、ディオニシウスの表現名辭がたとへ新プラトンの的であつても彼のうちに正統キリスト教的精神を充分に読み取つて居り、これはいはゞ正統的なディオニシウス解釈といひ得よう。

これに対して前者の立場はミュラーの考へである。彼はディオニシウスに殆ど何の独創も帰せず、ディオニシウスの存在にプロティノス、プロクロスの單なる継承者以上の附加的意義を何等認めないで、むしろ後代に與へたそ

の影響の大なるを不思議にすら思つてゐる。(H. F. Müller; Dionysios, Proklos, Plotinos. Beiträge z. Gesch. d. Philos. d. Mittelalters. Band XX. Heft 3—4. 1926. S. 110)。

併し乍らこれ等の他にディオニシウス説を單なる異教的汎神論乃至グノーシスの流出説と見る解釈者も、殊に近代において、相当数あることを看過し得ない。例へば Niemeyer, Siebert, Engelhardt 等前記解釈者とは半ばしてゐるが(霜山徳爾「キリスト教哲学の源泉を探りて」カトリック思想、二八ノ四号参照)、それは要するにキリスト教説と新プラトン説の両思想交錯圏内を浮遊するディオニシウス偽書の不確定な表現自体に由来する故に他ならないが、併しディオニシウスを以て單純にネオ・プラトニストと片付けるには著作の全篇に流れる彼のキリスト教信仰は余りに熱烈であり、又諸々の正統神祕家の伝統的解釈を一概に無視し去ることもできない。結局そのやうな解釈は彼が方法対象として用ひた新プラトンの原理を本来対象と見誤まるところに起因しよう。

〔附記〕

文中プロティノスの引用文には便宜上 Enneades の番号を記しておいたが、その翻訳には大体ハルダールの独訳に拠つた(R. Harder; Plotins Schriften. 5 Bände. Leipzig, 1930—7)。



又プロク羅斯の引用は原典を見る機会が得られなかつたので優れたドッツ版に拠れる五十嵐達六郎氏の邦訳を借用した（「形而上学」生活社刊、昭和一九）。

尙本稿は昭和二十三年度文部省人文科学研究費補助論文に若干の補正を加へて成れるものである。